

## 中川村新たな学校づくりプロジェクト 新たな学校づくりセミナー(R5.10.28) 「ともに育む 将来の担い手～学校・家庭・地域の連携協働～」

白川村教育委員会事務局 課長補佐 新谷さゆり氏

今、国はすごく「学校、地域、家庭のつながりを大事にしましょうよ」と言うんですね。なぜかという、皆さんなんとなく感じているように、教育環境を取り巻く状況とか社会の動向が非常に、私たち昭和の人間からすると本当に大きく変化してきています。だから、未来に向かう子どもたちのことを考えていくと「予測困難な未来」という言葉をよく使われます。ただ、この言葉は、ある意味実は「何でもチャレンジできる未来」という考え方でもできるんじゃないかと思います。例えば、このコロナでまさかのオンラインで授業をすとか、会議をするなんてことは考えてもいなかったと思うんですね。だけど、その予測困難に対して、人がそういったアイデアを出してうまく考えたということなんです。ただ、何でもチャレンジできるっていう一つの考え方であれば、やっぱり子どもたちには変化の激しい社会に生きる力をつけていかなきゃいけない。そして私たち地域住民も「行政がやってくれるわ」「誰かがやってくれるわ」ではなくて、主体的に自分たちが村を創っていこうよというような、そういった気持ちを持っていかないと、これからは生き延びていけない、そうやって言われています。ですから、今文科省が学校に対して「社会に開かれた教育課程を位置づけましょう」と言っています。で、文科さんは社会に開かれた教育課程のポイントとして3つ出しています。「よりより学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会とが共有します。」、学校教育に社会を創るということ意識しましょうということです。二つ目が「これからの社会を創り出していく子どもたちに必要な資質・能力が何かを明らかにして、それを学校教育で育成します。」、読み書きそろばんだけではダメですよということです。そして三つ目が「地域と連携・協働しながら目指すべき学校教育を実現します。」これら三つのこと、実はなかなか難しく、文科はそのためにいっぱいこういうポンチ図を出して「頑張れよう、頑張れよう」と上で言っとるんですね。けど私たち白川村なんか小さくて、このね、合わないんですよ、なかなか型に。で、すごく悩んだ結果出た結論は「合わんのなら、合う型を白川村流に作ってしまえばいいんじゃないかな」ってことを思って、今に至っているかなと思いました。

今日は、白川村には今学校が一つしかないんですが、村に1校となった白川村立白川郷学園、児童生徒数は113名ですね。もともとは、平成23年に小学校2校を統合して中学校の横に校舎を建てて小中一貫校としてスタートしました。その後に地域も一緒にということでコミュニティスクールに、平成25年になって、それを経て義務教育学校という形で平成29年度にスタートしたという学校です。小さい村なので今から私がお話しすることは8割方あんまり参考にならないようなことばかりだと思います。白川村だからできるんだよなんて内容ばかりだと思って聞いてください。でもこっちで言えばコミュニティスクールとか、また地域と一緒に取り組んでいくってことは、これは実は目的ではなくて手立てなので、何かのヒントになればと思って、今日、私はお話しさせてもらうので、そっくりそのままあれはできないというのは当然だと思っていますので、何かのヒントを得ていただければ嬉しいなと思います。私も最初から関わってきていたんですけども、学校を一つにして、そして学校、家庭、地域が連携、協働していくことはすごく大事だよ、ということは何となくわかるんですけども、何からやればいいのかというのは本当に

わかりませんでした。今振り返れば、組織を立ち上げてさあスタートという、みんな「これ何やる」「どの活動する」といって活動の話をしたがるんですが、そこをうちはせずに、最初に「何のために私たちは何をやる」目的を、まずしっかりと話し合うことから始めました。要するに、学校、家庭、地域が共通の願いを持つことをしっかりしていこうよ、ということです。統合した後にコミュニティスクールにする際に、私その係になったんですね。でも私はコミュニティスクール何のこっちゃわからんし、その作る価値もわからなかった。白川村みたいな小さな村にどうということや。だから、その必要性を探るために、最初は地域の方と先生方と一緒に少し村についてみんなで語り合いました。中川村さんも今やってきたよって先ほど教育長さんおっしゃっていましたが、その中で一番出た言葉が一番上です。学校が統合した、小学校が統合したばかりで、もう地域の教育力がガタ下がりでした。特に、私が住んでいる平瀬地区は平瀬中学校が先に統合してしまい、その後平瀬小と白小が一個になって新しい校舎ができたので、もう私の地区には学校はありません。去年、保育園もなくなってしまいました。何もないんです。だから、地域の人は統合したときに、「なんでもうあんな遠くにいった学校なんかに協力するんや」「あんなとこ行かんわ」「足なんか運ばんわ」ってはっきり言われました。だからこの後どうなるんだろうって、私はすごくそれが心配でした。この話し合いを進めていく中で、一番盛り上がったのはやっぱりここです「人口減少」。それから、どんどん減っていくだろうなって話はみんな口々に言う割には、その大人は5年後、10年後の村をはっきりと見ようとはしていない。「どうなってるやろ」「さあ、どうやろな」って言って、ちゃんとそこを感じ取ってない、当事者意識がすごく低いつてことが分かりました。そこで教頭先生が「新谷さん、こらあかん。やっぱ未来の白川村に向かっていくには、やっぱり学校と地域が一緒になっていかなきゃいけない時が来たんやぞ」って言われたんです。そのとき私ははっきりコミュニティスクールにする意味が分かりました。なるほどだから学校運営協議会を作らなきゃいけない。これは作るの目的じゃなくて、手立てとしてコミュニティスクールを作るならってことが腑に落ちました。もう少し説明すると、白川村は岐阜県でも北陸に近い方にあるんですが、世界文化遺産、合掌集落があったり、どぶろく祭りや伝統芸能とかがあります。今でもこの結いの心で茅葺きなんかもやっているような村なんですが、こういったものをやっぱり残していこうよ、ということで、村長はいつまでも住み続けたい白川村であろうという言葉を使い続けています。とはいえ、人口は1,500人を切りました。こういったことを真剣に考えたときに、やっぱり未来へつなく地域の意識向上をしていかなきゃいけないと同時に、人を育てなきゃいけない。だからこそ学校任せせずに、私たち大人が責任と役割を持ってみんなで育てていかなきゃいけないね、ということです。最初に何したかということ、これは検討委員会、コミュニティスクールを作るぞというときの検討委員会の一番最初の会議の様子です。もう、しっかりとした会議は一切やらなかったんですね。中川村さんでも、やられたとおりです。どんな白川村っ子に育てたいっていうのを、みんなで話し合いました。そのときに分かったことが、校長先生が「あら、こらすごいな。学校の教育目標「ひとり立ち、自立、共生貢献」と、地域の求めていることがぴったり合うね」っていうところに初めて気づきました。地域の方は、村民みんなに聞くと、実は白川村あるあるで、白川高学園の教育目標何ですかって聞くと全員答えられます「ひとり立ち」。村民憲章は、保育園から100歳のおばあちゃんまで空で言えるぐらいです。で、なるほど本当だ、一致してるねっていうところが見えてきたということです。コミュニティスクールにする前は、基本学校教育に対して、学校はすべて意図的な取り組みを行います。行事とか授業もそうですけど、地域の方や保護者の方にちょっと手伝ってほしい

ときはお願いしますって言って、協力とかお手伝いをしてもらいます。反対に、社会教育の、実は地域の目標、それぞれの団体が目的を持っています。そこに対して「先生頼むでちょっと手伝ってくれよ」「子供呼んできてくれよ」って言ってお願いをします。ですからお互いが受け身的な関わりなので、どこかで嫌だなんていうような声もそれは聞こえてきていたんです。ところがコミュニティスクールにすると、学校と地域が共通の目標「担い手を育てよう」ってということにはっきりと決めたときに、地域側は、何のために学校とつながるのがみんな分かってきたんです。だから、お手伝いってという言葉を使わなくなってきました。行って当然、子供と関わって当然ってなってきたんです。先生方も「コミュニティスクールになって忙しくなる」って最初は言っていたんですが、「なぜ地域の方と一緒にやらなきゃいけないのか」ってということが、教員が気づいて価値を理解できたから、もっとどういうふうな形でつながればいいのかっていうことを先生がアイデアを言うようになってきたということです。共通の願いを持った後に、私たちは責任と役割というものをしっかり分担しておこうってこともやりました。なぜならば、実は、学校と地域がつながると、おおよそ8割方、例えば地域とつながる担当の教頭先生とかの仕事がドカッと増えて本当に大変になります。だから、誰が何するってこともみんな話し合いました。それぞれ3つの自立・共生・貢献のところで、地域だったら何しなきゃいけないかっていうことだけ出しました。学校じゃなくて。そうすると、そういう地域の中には「子どもたちにチャレンジさせる場所ってないな」「結構お客さん扱いしとるな」「子ども会なんかも育成委員がなんかやり過ぎとらんか」とかそういう声がどんどん出てきました。で、こうやって話し合ったら地域の方とお腹いっぱいになって「ああ、いい話し合ってきたな」って終わったんですよ。「ダメダメ、誰がやるのかを決めましょう。ここは学校と地域と一緒にやるところ、ここは地域で責任を持つところ。これは家庭でやるところ」このことを割り振ったことで、ある委員さんから「これは学校運営協議会作っただけでは実現できんぞ」って。学校運営協議会ってのが決まって、会議みたいな3つのお仕事すればいいので、そうなんです。だから実働部隊っていうのを作ろうとなって、学校運営協議会の下に、学校を支えていく部会と地域活動を推進していく部会っていう部会を作ったんです。で、ちょっと進んでいくうちに、令和3年に「ああ、家庭もしっかりさせな」ってということで、家庭サポート部という3つの部会が出来上がりました。学園と地域が共通の願いで繋がって、学園という場所、先生ではありません場所です。地域、家庭という場所、学園という場所で、担い手育てを推進するのは学校支援部さん。地域という場所は地域活動部さん。家庭という場所は家庭サポート部さんが中心になって、学校運営協議会と一体的になって、子どもたちと関わる全ての人が役割と責任を持って担い手を育てていこうよ、というような形で白川郷学園は進めています。この3つの部会が中心にやってくれている活動のことを白川村では地域学校共同活動と、まあするいやり方なんですけどね、これが白川郷学園の形です。こういう形で進めているところです。学校運営協議会では主に、15歳までの学びや体験の蓄積をより良くする話し合いを中心にしています。なぜかという、白川村には高校がないので、中学9年生を卒業したらもうみんな外へ出ます。今でこそ高速バスでちょっと通えるんですけども、ほとんどの子、8割ぐらいの子が下宿したりアパート暮らし、一人暮らしをしていきます。だからこそ、15歳までにどんなことをしておくといいのかなってことを話し合います。先ほどから担い手って言葉を使っていますが、担い手って言うと、村に帰ってくる子なのかっていうのも実は議題で出ました。だから学校協議会でこのことも話し合いました。「うちの子、村へ帰ってきとらんけどどうしよう」っていう親さんから出た意見です。私たちが考えていく担い手さんって、「帰って

こいよって言われたら帰ってきた」あつ、それもいいんですよ。だけど、本当に求める担い手は「僕のやりたいことは村に帰らんとできんのよ」、そう、帰村は目的ではなくて手段。「僕はこれをやりたいから帰るんだ」、実際にいます。まず、獅子をやりたい、花とりをやりたいとか、獅子舞をやりたいからと、職業的なこともあります。地域のつながりのことも言ったりします。でも中には「僕のやりたいこと、今は村においてはできんねん」、じゃあ、悪い子か、そうではありません、っていう話をみんなでしました。こういった離れた子も心の中で「でも、僕は村に何か貢献したい」もしくは「いずれは帰りたい」「離れていてもできる貢献があるんだ」、実際にふるさと納税をやっている子もいたり、村の行事のためにわざわざ休み取って帰ってくると、かいろんな形で貢献している若者がいます。じゃあ、私たちが言っている担い手は、ふるさとへの熱い思いを胸に、村に貢献できる人ということに、みんなで担い手さんというのを育てていこうとなりました。そのためにはやっぱり15歳の独り立ちまでの蓄積が重要。それは、知るとか覚えるレベルではないです。さらに、大人との関わりがすごく重要で、そこでふるさとの良さや誇り、志、夢をお腹いっぱいしておくことが重要。帰村を目的ではなくて、目的があつて帰ってくことを育てたいという思いです。そういった思いを持って、それぞれの部会も皆さん活動をしています。ではどんな活動をしているかということは今から事例をお知らせします。まず、学校支援部さん。ここの部会のキーワードは、とにかく学校が小さくてあと白川村出身の先生がいないので、3年で大体先生方が替わって行ってしまいます。だから「職員の異動の度に活動が変わったり、中には無くなってしまったりする活動もあるんや」「地域のつながりに対して熱意がある先生がおるときはいいんやけど、おらんようになってまうとな」という意見がいくつか出ていました。だからこの部会は、とにかく地域力を生かした、安定した学びの土台を作ろうよ、というところをテーマに3つの活動を主にやっています。1つ目は人材バンク整理。これはよくどこの学校でもやっているんですが、地域の方々が授業の中で発揮できるような専門的な知識、技能を持っている方を一覧にしてあります。それを先生が見て連絡をしたら来ていただけるようなバンクを毎年見返しています。それから先ほどちょっと紹介ありましたが、村民学という教科があります。義務教育学校になると、特別な教科、自分たちの独自の教科を作ることができますので、村民学という教科です。その中の1つ、キャリア教育の一環で白川人学という授業を年間1回か2回なんですけど、ブロックごとで、今年はこの1年生から4年生の低ブロックには、こんな気づきになってほしいので、こんなような価値の講師を呼ばませんか、と言うとその部会の人を探してくれるということがあります。そして、その部会の人を探して電話をしてOKまでもらって、後は先生と打ち合わせをするだけです。その手間をこの部会の方がやってくれています。例えば、去年7・8・9年生、高ブロックでやったのが「あなたの20年後は…3つの生き方に触れて自分の人生を想像しよう」ということで、最初、先生から提案あったのは、Uターン者とIターン者と、ずっと村に住んでいる人の3人の対談を子どもたちとして欲しいと言われたんです。そして、その目的が20年後、自分は白川村に住んでいるかという題材でお願いしますと言われました。ところが、部会の方が「いや先生、こっちの方がいいんじゃないか。UターンIターン、逆Iターン、要するに白川村から出て行って活躍している人、これどうや」と。で、何を成し遂げたか、なぜそこに住んでいるのかではなくて何のために私は住んでいるのかとか、そういうような形はどうかと。これは実は学校の先生は、言うのはタブーですね。「村に帰ってきていない人のことを紹介して、対談させるなんてことはいいんですか」って言ってました。いいじゃないですかと、そういう外に出ている外とつながることが重要だということで、逆Iターンの子はZoomで出てもらった

ということです。この時の子どもたちの感想は、私は本当に痺れたというか。普通、いつも子どもたちの感想というのは「すごいと思いました」というのが大体出てくるんですね、いろんな人と呼ばと。でもこの日は誰も言わなかった。本当に親身になって特に9年生の子は受験を控えていたので、すごい自分と置き換えて、質問する内容も「それって、中学の頃から思っていましたか」とか「目標っていつから持ち出すんですか」とか、本当に徹底的にその人たちに聞いてくれて、生の声をどんどん聞くことができ、本当に充実した時間となりました。これもやっぱり教員の力だけではなかなかできないプランだなと思いました。また、この部会は面白くて、コロナの間なかなか地域の方を呼んでこれなかったのもデジタル教材で5分程度の「夢動画」っていうのを、村民とか元村民の人とか、村外の方とかの面白い職業的なこととか、生き方とか大学生とか、そういう子たちに5分程度の動画を集めて、これを先生方にお好きに使ってくださって渡しています。だから、子どもたちは、声優さんになりたいという子がおれば、実は声優さんのお話もあったりするんですね。それを自分のiPadに入れてそれを見るっていうようなやり方もしています。これ今13個なんですけど、一昨日16個まで増えました。3個増えました。それは高校生が自分の高校の紹介をしています。みなさんご存知のN高っていう面白い高校があるんですけども、うちの学園の子去年N高に行った子がいて、その子がN高の紹介を色々してくれて、そういった高校どんな生活してるのかなっていうのが見えないので、うちは高校がないんで、それも教員の役目じゃなくて、この部会の人は今やっているところです。最後に学年コーディネーター選定っていう、村民学の中にはふるさと学習っていうのは位置づいています。この画面は各学年に2人ずつの地域コーディネーターをつけています。要するに18人いるってことですね、コーディネーターが。その方と担任の先生と相談会をしているところです。1年から9年まで、実は村民憲章をベースにしたふるさと学習のカリキュラムを作りました。義務教育学校をスタートさせる29年度に向けて、ふるさと学習の位置づけをもっと地域と関わりをよくしようってことで、この部会の方々、先生が作ったというよりは、先生と部会の方で考えて作りました。1年生から順番にいくと、村民憲章をコンプリートするような形になっています。作った時にすごいみんな「これいいアイデアやなあ」って言ってたんだけど、あるおじちゃんが「だけこれ、先生にはようやれんやろ」って言われて、そうだなって。だからコーディネーターつけてみるかってなって、最初は1人ずつで9人しかいなかったんですけど、先生からの要望で「なんとか2人つけてくれんかな。1人の人が仕事で来れんというのがあるので、もう1人いるとちょっと楽です」とか「話し合いも1対1よりは3人おったほうが僕も気が楽です」とか、いろんな理由で今は2人いるってことです。私も実は7年生のコーディネーターになって、学校支援部の方から電話がかかってきて「さゆりさんやってくれ、7年生」って「えー」って言ったんですけど、まあしゃあないなと思って、今7年生のコーディネーターやっています。例えば5年生、ど真ん中の5年生、この人は全然白川村の人じゃありません。コーディネーターでもないです。コーディネーターっていうのは、人をくっつけてくる役割を持っているので、この5年生は祭りや伝統芸能の学びをしています。で、ちょっと先を見てください。ここの4・5・6年生は、「不変と変化を考え未来につなぐ」というゾーンです。これはふるさと学習っていうと、結構昔のこととか大事にされているものをそっくりそのまま伝えていくっていう学び方が多いです。でも、担い手として未来を切り開いていく子に、昔のまんまのものをずっと伝えるっていうのは正直、どうかなと思って、これ2年ぐらい前に変えました。つないでいくためには変えちゃいけないところと、変えていかないと残らないものもあるんだってことです。そこを子どもたちが真剣に考えることで、大人も

関わる大人も意識しだす。そこで、この彼は新潟県の越乃寒梅のお酒を作ってる石本酒造の息子さんで、いずれ社長さんになられる方です。今はサントリーに勤めて、この間も白川村に来てくれたんですが、この方と一緒にどぶろくづくりのこと、今の白川村の祭りのどぶろくづくりのやり方のことで、すごい素晴らしいことなんだってことと、このまま行くと続かんかもしれんっていう課題を話し合っ、どうしていくべきなのかってことを話し合ってきました。だからここに地域の方々も入るので、「ああそういう課題があるなあ」って、大人も真剣に考えていくことができる。私、社会教育主事なので、当然子どもを育てることも大事なんですけど、大人を育てていかなないと未来につながらないので、やっぱり、使うって言ったら悪いんですけど、子どもをちょっと上手に使って、大人も気づき、変化させていくってことがすごくいいかなってことを思っています。これは4年生で、つい先週ですね。本物を見てから、今度は自分たちも実際に合掌の屋根組みをしていくっていう、職人さん5人きて実際に職人さんに教えてもらってます。これは結構何年も続いていて、この屋根組みの部分までが授業の一つになっているんだけど、去年くらいからちょっと内容が変わりました。これ実際に茅をこうやって、屋根を茅を葺くところまで去年からやるようになったんです。これは実は職人さんのアイデアで、やっぱり屋根葺きまでやったらどうかと、これ本物の実際に使う道具を使って職人さんに実際に教えてもらいながらやっていく。これ今ちょっと可愛い男の子がチラッと見えたんですが、彼はこれをやって「僕はもう絶対将来茅葺き職人になるんや」って言ってました。彼のうちは合掌造りなので意識も高いかなと思いますが、合掌に住んでないと、ここの学年だと8割方合掌に住んでないんですね。そんな子も意識を持つっていうことですね。私の目標は、今茅葺き職人さん全員、荻町地区の合掌があるうちの方なんです。全然違う平瀬地区とかそういう地区の子が将来茅葺き職人になってくれたらいいなってすごく思います。それぐらい地域が一個になっているの、学校ってのは一つになっているので、そういうこともあるんだよっていうのが、私は義務教育学校の良さかなって思います。この部会があることで、もちろんコロナの中でも職場体験、担い手体験を無事終えることができました。またこれは学園側が開催しているんですけども、毎年地域公開日っていうのが位置づいています。地域の方誰でも参観できる日で、移住者でもあってもいいし、どんな方でもいいので授業参観は来ていいんですよっていうのがお休みの日にあります。この時に子ども未来会議っていう会議を位置づけています。これは5年生以上、5年生から9年生が地域の方とテーマを持って語り合う。最初の頃は、うちの子たちはすごい真面目で、言われたことをできるんだけど自分でアイデアを出したり、あと発信することが苦手だって言ったら、委員さんがそういう場を作っていないからじゃないかと言われました。子どものせいにするなと。じゃあ、そういう場を作ろうってことで、大人の前で堂々と自分の意見を言ったり、お互いが話し合う場を作ったんです。ところが最近レベルが上がりすぎちゃって、村の課題とか、子どもの方がガンガン言うようになったら議員さんが喜んじゃって「じゃあ、議会提案とかやってみませんか」ってなって、令和元年から議員さんのアイデアで、こうして自分たちのアイデアを議員の方々につけて、議員から質問されてもガンガン頑張って答えていくような、こういうような体験も今やっている、これはお遊びみたいなことなんですけど、こういった体験をしています。はい、これはかわいいおばちゃん、うちの母ちゃんなんですね。うちの母ちゃん、実はものすごい統合大反対だったんですよ。さっき言った言葉を、うちの母ちゃんがズバリ言ってました。「なんであんな新しい学校に行かなあかんのだ」って、けん幕で言ってましたね。だけど、これよく見ると新しい学校に来てるんですね。嘘つきやね。これ民謡教えてるんですよ。ある時、母ちゃん地域公開日に

来てくれてさっきの未来会議に参加したんですよ。そしたら手を挙げて喋りだしてね、やばっと思って。そしたら「おばちゃん、統合大反対やってんな」えらいこと話すなと思ったら、「でもなおばちゃん間違っと思ったの。こうして学校来てな、みんなが地区関係なく、こんなにみんなと一緒にあっていろんなこと取り組んどる。おばちゃん間違っと思った。だからおばちゃんまた来ると、よろしく頼むな」って言ったんですよ。私、泣けちゃって、なんだこれと思って。やっぱりね、コミュニティスクールとか義務教育学校も一つになって、そして地域と一緒にいるってことは、地域の人を変えていくんだなって本当に心に思いました。子供を変えるのは当然だけど、地域の人が変わるんだなってことを本当に強く思います。続いては地域活動部さんです。ここはもうズバリ、誰もが当事者意識を持って子供たちとか教育に楽しく関わるっていうことをテーマにしています。地域の人や学園に足を運ぶ量は多くなってきてるんだけど、よく見ると、だいたい固定された人なんですよ。それって多分、どこの学校も一緒です。ただ、白川郷学園はそのことを知っていて、毎年新しい人をちょっとずつ入れていくような作戦をねって、この部会の方々ですが、1年に3人ずつくらい新しい人を入れればどんどん増えるなあなんてやってます。でもここでは「もうあんな学校なんかいかん」って言う人、担い手育てをしていこうよというところをテーマにしているので、学園という場所ではなくて、地域という場所の中で担い手育てをしていく作戦もねっています。例えば、これはどこでもあるような見守り隊みたいなことなんですけど、これは見守り隊ではなくて、ふれあい週間で挨拶をしようよってことです。中川村はさっき資料みたいなもので、ものすごく挨拶するよって書いてあったので、そういったことで人がつながっていくといいねっていうことで。あるおじちゃんが「バスで通うようになったから、子どもなんか見んのやさ」って言うたら、そしたら委員の人が「いやいや、バス停に子どもいますけど。行けばいいじゃないですか」、そのとおりやって話なんですね。その作戦のためにこういったことを実際にやるようになったんです。ところが2・3年経ったときに、ある委員さんが「これってよう、大人の満足なんじゃないか」って言い出したんですよ。「子どもはどう思ってるやろ、このことを」と。そしたら先生が、「じゃあ、子どもと話してみますか。委員会があるので3時に来てもらえればいいですよ」って言って、皆さん仕事帰りで来てくれて、そして子どもたちといろいろ話をしました。そしたら、あるお父さんが「あんなあ、挨拶するんやけどよ、ちっとも返さんやつがおるんやって」って言いました。実際にそうなんですよ。そしたらね男の子が「いや、違うんです。しないんじゃないんです。できないんですよ、恥ずかしくて」。なるほど、しないんじゃないかと、それが大人は分からなかったと。「じゃあ、そうじゃない方法も考えてかなあかん。ちよっと手を挙げるとか、挨拶するとか」、ちよっとずつのことを変えていくし、大人も「しないんじゃない、できないんだ」って思うことが大事なんじゃないかってことで、こういったチラシなんか子どもたちと一緒に大人が作って、そしてずっと続けてきました。今ではもう話し合いもしませんし、チラシも配りません。こうしてずいぶん定着してきて、ベスト着てるおばちゃんたちは昔のベスト着てるんですけど、基本もうベストないので、こういうやつでおばちゃんたち、毎日関わっていただいています。これは夏休みのラジオ体操の様子ですね。よくある様子です。こっち、右側見ると、これみんな子どもたちももういない。おじさんとかおばさんなんですよ。子どもたちハンコをもらう、このおばちゃんも一緒にハンコをもらうんです。実はこれ、子どもたちとの関わりを作るために、最初はスポーツ推進委員さんのアイデアで、子ども会とスポーツ推進委員で考えて、村のラジオ体操カードを作ろうよってなって全戸配布してあります。一軒に一枚、誰が行ってもいいから、これを持って行けっていう感じ。

それを今、ここの部会がデザインを任されて、この人たちがデザインして、いろいろ子どもたちと関わりやすくしています。それから、これは学校評価ですね。これは令和4年の7月の学校評価で、副校長先生が学校運営協議会で「子どもたちは地域における清掃活動とか、そういった仕事に参加するのがポイントが下がってました」って言ったんですね。普通、学校評議員だと「どうするんや」って終わるんです。どうするんや学校は。ここは学校運営協議会なので地域活動部さんは言いました「じゃあ、地域活動部何しんならんのや」。で、考えたのが「ちよいボラ！地域ボラ！担い手活動」。もしかして子どもたちは地域にどのような活動があるのか知らんのじゃないか、だからこういうのを作って調査して、この人たちが表を作って、これを子どもたちと保護者、もちろん全戸配布です。「地域の子が来るで、受け入れてくださいね」ということを発信しました。「写真を送ってね」というQRコードが付いておって、写真が送られてくるので、こういうのを学校に掲示したりしていますね。また、今年は久しぶりに結いでの屋根葺きがあつて、これも「参加したい人」って手を挙げた子が、現地に子どもたちが来て、そして大人と一緒に働くんですね。私が一番好きな写真は、右下のこの女の子が休憩のときにおじちゃんたちと会話をする。こういうのをお腹いっぱい溜めておくことが、私はすごい重要なことを思います。最後です、家庭サポート部さんです。ここは令和3年に出来上がった部会です。最初の頃はPTAとの関わりがうまく学校協議会ができていなくて、一番家庭が担い手育ての意識を持たなきゃいかんのではないかというのがずっと議題に上がっていて、じゃあ、思い切って家庭サポート部を作ってみようよと。我が子の魅力を親子で一緒に見つけて、全部勉強を学園に任せるのはやめさせないか、というようなことで、実際に今こういった3つのことをやっています。最後がちょっと面白いのが『「学力向上」じゃなくて「学欲向上」が大事なんじゃないか』というような意見が出ています。ここは、新しい部会なのかもしれないけど、すごい生き生きと楽しそうにやっています。アイデア出しまくって、失敗すればもうこれはやめ、次は新しいことくらいの勢いでやっていますね。例えば、これは「ちよい勉」といって、どの子の学年も自主勉強モードというのがあるんですけども、そのアイデアをただドリルやったり、同じとこばかりやっていたりするので、「そうじゃない。こういうのがあるよ、どう」というので、この方々が出てきたわーつと出したのを「新谷さん、これをファミレスみたいなメニュー表みたいなのに作ってきて」と言われて、これは私が言われたやつを並べて実際に作ったんですが、ここに書かれていることは全部ここの部会の方々がアイデアを出されました。またこれは次の年、去年はこのマイロッカーというのは、大谷翔平さんのに似ているんですが、「自分の好きなことや得意なことは何かなかな、苦手なこと一個書いてみようよ」という、親子で自分が好きなもの、興味のあるものを見つけていくところ、これが学力に一つつながるかもよ、というのをやっています。この2年生の男の子のお父さんお母さんもやっています。とってもいいですね。お父さん好きなものコーラ、お母さんお酒って書いてます。感動ですね、これはね。これが今年です。今年はさらなるパワーアップして、左側に書いたこのマイロッカーに一つだけ選んで真ん中に書いて、それに向けて何をやったらいかな、というのを花びらのところに書いてありますね。この子は4年生の子で、お菓子作りって書いてあつて、しっかりと何になりたいっていうことが「タイ」って書いてあつて、最後振り返りで何パーセント近づけたか、というのも書いたりして、この子はこうして書き出してみるとやりたいことがどんどん出てきている。ここがすごく重要で、頭の中を整理するためにこれはこの部会の方が考えました。子どもだけじゃなくて、実はこれ保護者も、そして先生もやりました。これがこの部会の方々が集まったものを全部こうB紙（模造紙）に書いて貼って、あと、



素敵なおところにちょっとコメントなんかを書きながら、これを学園の廊下に掲示をしています。ということで、白川郷学園は学校運営協議会を中心に、地域とともにつなぎられるような形で部会を作って進んでいます。なかなかこれだけでも難しく、実際私は社会教育主事なので、社会教育の団体さんにも同じ目標を持って取り組んだら、もっと早く担い手育てができるんじゃないかなと思ってやっています。どこの村も、どこの市でもいろんな社会教育団体さんがあるんですが、それぞれいろんな活動をしているんですけども、活動自体がゴールになっていて、何のために盆踊りやとるのやろか、何のために運動会開催しとるんやろというのは、もうハテナ。とにかくやればいい、何とか終わったとか言って、そんな感じになっています。そこをちょっと、目指す方向を、地域が向上だけど担い手を育てていこうよ、というような一つの目標にしてみました。そのことで、2年で1期、2年1期で終わるんやという人も、目的が見えてきたら楽しくなってきたという人もおったりして、ちょっと変わってきました。今年は特にコロナからの第1歩目の年だったので、社会教育委員さんがみんなて話し合いをして、各団体がきっと困っているから5月に全員集めるんですけども、どんなことも多分困っているか、こういったことを伝えた方がいいんじゃないか、ということをお社会教育委員の方々でみんなて話し合っ、みんなを集めて発信していました。これは各団体の方々全部来ているんですけども、この日は団体じゃなくて、地区ごとに集まって地区の中で担い手を育てていくにはどうすればいいかな、すごいことが分かって、この日。子どもの担い手を育てるよりも、青年ぐらの年齢が不足していて、なかなか地域が行事が難しいというような課題があっ、そのアイテアとして「団体同士が全然違う団体が助け合っ、やっていくのはどうか」とか「青年会に昔の青年の人が来て手伝うのかどうか」とか、そういったことをこの中で話し合っ、していました。だから、実際に今年の活動ではそういうふうにおコラボしてやっしてみえるところが増えていました。この団体さんでどうやっ、担い手育てしていけばいいのかっていうところなんですけども、こういったことを4つのことをビシツとこの会で伝えていきます。とにかく一緒に活動しまし、一緒に場所におるんじゃないかと一緒に活動します。そして、その中で声をかけていしまし。おばちゃんから叱られた、褒められたってのが大事なんです。それから、役や場を与えまし。危ないでやっ、ちゃダメじゃない、「あと、お前に任せたぞ」、こういうのが実は重要だと。最後が、大人が真剣に楽しむ。真剣な姿とか楽しむ姿がすごい重要なんだと。こういったことを、偶然じゃなくて意図的にちょっとやっ、ていしまし。そうすると地域のお人はこうやっ、て言います「うちらはちゃんとつながつとるやん」。分かってますよ、いい活動してますよ、でもそれは無意識的につながつ、ているというか、私たちちゃんとできているんだけど、ここで意識化すると声かけの質がすごく変わってきます。あとでちょっと紹介しますが、例えばこれ、南部地区の運動会ですね。これはコロナで明けて今年再開したんですけども、この写真で素敵なのは綱引きしているのは子ども誰もやっ、てないです。応援しているんですよ。いつもなら反対なんだけども、大人が真剣に戦っているのを子どもが真剣に応援する。例えば右の写真、一番最初に走っている子は9年生です。真ん中は八幡信用金庫の職員です。そして一番最後は副校長です。この3人で走るなんてまずないですね。こういうのが私は素敵だなあと思う。それから、この運動会は前日の清掃活動、これはボランティアで誰が出てもいいんです。来なくてもいいです。この男の子、グレーの服の子は、実は2ヶ月前に移住してきた子なんです。だから地域のお人のこと全然知らない。でもこの日清掃活動に来ていたからこそ、この日の運動会全然知らんおばちゃんと組んで、こんなに喜んですごく楽しんでます。お母さん、お父さんもすごい楽しんでます。それからこれは意図的に、ある種目だけを子ども

もたちに任せてあります。リレーなのですが、そこは大人は一切構わない。だから並ぶ順番とか走る順番とか、全て1年生から9年生の子たちで自分らでやるよっていうのを意図的にやっています。また、これも自分たちで出て行ったんだけど、パン食い競争で乳幼児の子がどこに行っているかわからなくなっちゃった。そしたら男の子2人が出てきて、優しくね、こっちだよって。ここまでいいシーンだなと思うんだけど、ここからが大事で、これ、団席に帰って行った時におばちゃんがね「そうすけ、お前ええやっちゃなあ。あつたかなつたわ」この言葉だけが私はすごい重要だと思います。このシーンの裏にあるところがすごく大事なと思います。この日、あ、私いますね、このピンクの素敵なこの着てね。実は私、今年公民館運営委員長やらされてましてね、やらされてって言っちゃダメなんですけどね、はいやってまして、これ終わってからあるお母さんが私にLINEをくれたんです。『さゆりちゃん、うちの子こんなこと言っとったよ。「お母さんこの運動会さ、これからもずっとあるんやろか。僕さ、あるんやったらここにずっとおりたいな」って言ったの』。もう、私じ〜んときまして、これだ、蓄積させていくってこういうことなんだなって思いました。だから、人と人とのつながりは未来につながるなってことをそのお母さんから教えてもらいました。これ盆踊りの次の日のシーン。さっき言った4つのことで無意識を意識化することなんですけど、これ、この子しか来てなかった。父ちゃんが意識して連れてきたんですね。そしたら「おい、よう来てくれたな、ありがとな、こうすけ」「こうくん、これもなお願いしていいか」「いいか、先におっちゃんやってみせるでな。これ、真似するんやぞ」「こうすけ、これは来年のことも考えてこういうふうに順番にしまうんやぞ」、こういう言葉がけはやっぱり皆さん自然にできているんだけど、そこに意識することで子どもも「はっ」価値付けられるし、すごく素敵です。これですね。他にもこれはコロナ前なんですけど、こういったそれぞれの団体さんも、子どもたちの取り組んだいろんな活動をしています。こういった大人のやっている姿を広報、村広報にページをもらっているの、こういったお知らせをします。子どもっていうのは基本、褒められるので価値付けられるからいいんだけど、大人の価値付けが重要で、あなたのやっているその活動がめっちゃいいんですよ、というのを、こういうので村全体に知らせることが大事で、「はっ、こういう意味なのか」というのを村民にどんどんと伝えていくことも重要かと思っています。こうして、将来に向かって生きる力を身につける子どもたちと、そこに関わっていく主体的な大人。私はやっぱり大人が大事だと思っています。つながるっていうことは、目的なのか、手立てなのかってことを考えると、つながることが目的だとすると、その評価、最後のゴールは、たくさんつながれたから、たくさん地域の方が学校に来てくれたから、ってところです。だから、学校は地域の方が来てくれる行事を必死に探して、必死に考えて、活動、活動ってやるんですね。でも、つながることが手立てだとすると、目的が別にあります。白川村は担い手育てをしていく、というところです。だからゴールは「子どもは担い手となる姿に近づいていっているかな。そして、私たちはその担い手育てとして必要なつながり方ができているかな」っていうのが常に評価です。そうすると、地域の方も主体的に子どもの担い手育てとして関わってくるといことです。ここがすごく重要です。活動だけでつながることが、連携・協働ではないということなんです。また、連携・協働のためには熟議が必要です。すでに中川村さんはもう地域の方々いろいろな語り合っていますが、やっぱり毎年やらなきゃいけないなことを思います。白川郷学園ちよつと義務教育学校を作るときにすごく忙しくて、熟議をやらなかった年がありました。そのとき、ちよつと地域と学園がギクシャクしていたんですね。私は文科省の方に相談したら「新谷さん熟議やってないでしょ」って言われて、「はっ」と思って、その年にやったらやっ

ぱり大事でしたね。何を願っているのか、どういう方向に行くのかってことをすごく大事にして、毎年必ずやるようにしています。ということで、すごいスピードでバババンと喋りましたが、私振り返って一番大事なのは、一番上の共通の願い、何をやるよりも、まずは、なぜするっていうことをみんなで話し合うといいですよってところを大事にするといいかなって思います。皆さんのページに書いてあります。これは学園を卒業した子たちのインタビューした言葉が書いてあるので、また読んでおいていただければと思います。最後に写真紹介です。これは先日行われたどぶろく祭りのある一つのコマです。これは私が「おおっ」と思って思わず写真を撮ったのが、この真ん中にとっても可愛い子たちね、この1・2・3・4・5ぐらいですね。この子たち、真ん中には大学生だったり、あと仕事をしている子なんですけど、実は村に住んでいませんけど、どぶろく祭りのこのお酌の仕事のために帰ってきました。すげえと思って、どうして帰ってきたのかって「だって、好きなんだもん」「だって、好きだから」。なるほど、それが答えなんだなと思いました。お腹いっぱいになってきたからこそ、彼女たちはこうして手伝いに来てるのかなぁと思いました。またこの中の一人の子は「私ね、卒業したら帰ってくるでね」って言うてました。なんかいいなと思って。こういう子を増やしていきたいのは、私たち白川村の目指す方向です。ご清聴ありがとうございました。